

問1 応仁の乱ののち、実力で領地を広げた戦国大名が、自らの領国内を統治し、家臣や民衆を支配するために独自に制定した法律を何とといいますか。  
。（2023年 静岡県公立入試 類似）

1. 建武式目

2. 分国法

3. 武家諸法度

4. 御成敗式目

問2 島根県にある石見銀山が、2007年に世界文化遺産に登録された歴史的な背景や理由として最も適切な説明を次の中から選びなさい。  
（2016年 島根県公立入試 類似）

1. 16世紀から17世紀にかけて大量の銀を産出し、アジアだけでなくヨーロッパ諸国との貿易においても重要な役割を果たしたため。

2. 瀬戸内海の水運を利用して全国に銅を供給し、江戸幕府の貨幣制度の安定を支えた最大の拠点であったため。

3. 明治維新後に政府によって官営模範工場が設置され、日本の近代産業の発展を象徴する場所となったため。

4. 飛鳥時代に日本で初めて銅が発見された場所であり、日本最古の貨幣である和同開珎の原料を供給したため。

問3 16世紀半ばに種子島へ伝来した鉄砲は、その後の日本の戦い方を大きく変えることとなりました。鉄砲の普及が戦国時代の社会や軍事面に与えた影響として、最も適切な説明はどれですか。  
（2016年 千葉県公立入試 類似）

1. 騎馬武者の一騎打ちが重視されるようになり、個人の武勇がより重んじられた

2. 鉄砲の製造が困難であったため、京都周辺の限られた大名だけが勢力を伸ばした

3. 足軽などの歩兵による集団戦法が主流となり、戦いの規模が拡大した

4. 武器の威力が向上したため、平地での戦闘を避けて山城にこもる戦術が一般的になった

問4 16世紀に起きた「ルターによる宗教改革の開始」「イエズス会の設立」「フランシスコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来」という3つの出来事について、時期の早いものから順に正しく並べたものはどれですか。  
（2020年 長野県公立入試 類似）

1. ルターによる宗教改革の開始 → イエズス会の設立 → フランシスコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来

2. イエズス会の設立 → フランシスコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来 → ルターによる宗教改革の開始

3. ルターによる宗教改革の開始 → フランシスコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来 → イエズス会の設立

4. フランシスコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来 → ルターによる宗教改革の開始 → イエズス会の設立

問5 1543年に種子島に漂着した船により、日本に初めて鉄砲が伝えられました。当時の種子島の鍛冶職人がその仕組みを学び国産化を進めたといわれる、この武器を日本に伝え、後に長崎などを拠点にキリスト教の布教を伴う貿易を行った国はどこですか。  
（2016年 長野県公立入試 類似）

1. オランダ

2. ポルトガル

3. イギリス

4. スペイン

問6 戦国時代において、各地の戦国大名が自らの領国（分国）内の武士や民衆を統制し、領国内の秩序を維持するために独自に制定した法律を何とといいますか。  
（2024年 千葉県公立入試 類似）

1. 武家諸法度

2. 分国法

3. 御成敗式目

4. 公事方御定書

問7 戦国時代の社会や法律について説明した文章として、「朝倉氏が城の建築を制限する規定を設けたことや、武田氏が喧嘩両成敗の原則を定めたことなど、大名が独自に定めた規定が存在した」という記述があります。この記述の説明として最も適切なものはどれですか。  
（2026年 岩手県公立入試 類似）

1. これは鎌倉幕府が御家人同士の土地の紛争を裁くために制定した御成敗式目に関する記述である。

2. これは下剋上の風潮のもとで戦国大名が定めた分国法に関する記述である。

3. これは江戸幕府が成立した直後に各大名を統制するために出された武家諸法度に関する記述である。

4. これは室町幕府が守護大名の権力を強めるために制定した建武式目に関する記述である。

問8 戦国時代、現在の島根県に位置する石見銀山は日本最大級の銀山として知られていました。この銀山の支配権をめぐる、中国地方を舞台に激しい抗争を繰り広げた戦国大名の組み合わせとして適切なものはどれですか。  
（2026年 島根県公立入試 類似）

1. 島津氏と大友氏

2. 武田氏と上杉氏

3. 織田氏と今川氏

4. 尼子氏と毛利氏

問9 ヨーロッパからアジアへ向かう海上航路において、アフリカ大陸の南端に位置し、中継地点として重要な役割を果たした場所の名称として正しいものはどれですか。  
（2020年 新潟県公立入試 類似）

1. スエズ運河

2. マゼラン海峡

3. 喜望峯

4. パナマ運河

問10 室町時代後半に見られた、実力で上の身分の者を圧倒する社会的な風潮の中で、それまでの守護に代わって台頭した勢力があります。自らの力で領地を拡大し、独自の法律である「分国法」などを定めて領国を支配したこれらの勢力を何と呼びますか。  
（2020年 千葉県公立入試 類似）

1. 守護大名

2. 御家人

3. 戦国大名

4. 地頭

問11 室町時代後期、応仁の乱をきっかけに幕府の権威が衰えると、実力で領地を拡大する戦国大名が登場しました。彼らが自らの領国内の武士や民衆を統治し、秩序を維持するために独自に定めた法を何とといいますか。  
（2023年 栃木県公立入試 類似）

1. 公事方御定書

2. 武家諸法度

3. 分国法

4. 御成敗式目

問12 戦国大名の本拠地として発達した「城下町」の形成と役割について述べた文として、最も適切なものはどれですか。  
（2017年 大分県公立入試 類似）

1. 海外との貿易を独占するため、すべての城下町は海岸沿いの港町に隣接して造られた。

2. 農民が武器を持って城下町に集まることを推奨し、有事の際の防衛力を高めた。

3. 戦乱による被害を避けるため、城の周囲には武士のみを住まわせ、商人には立ち入りを禁じた。

4. 大名が家臣や商工業者を城の周辺に集めて住まわせ、政治・軍事・経済の拠点とした。

問13 戦国大名が制定した「分国法」には、家臣同士が私的な理由で争うことを厳しく禁じる「喧嘩両成敗」の規定が多く含まれています。このような規定が多くのだ名によって導入された背景として、最も適切な理由はどれですか。  
（2023年 栃木県公立入試 類似）

1. 家臣同士の私闘による戦力の消耗を防ぎ、大名を中心とした組織的な団結を固めるため。

2. 家臣たちの不満を解消するために、すべての裁判を幕府の裁定に委ねる必要があったから。

3. 貨幣経済が浸透し、武士が戦うことよりも商業に従事することを推奨したから。

4. 海外から伝来したキリスト教の教えに基づき、平和な社会を築くことが求められたから。

問14 戦国時代、九州の種子島に伝来した武器をきっかけとして始まった南蛮貿易について、当時の状況を説明したものとして最も適切なものはどれですか。  
（2016年 長野県公立入試 類似）

1. 銀や銅を輸出する代わりに、欧米から蒸気機関などの近代技術が導入された。

2. キリスト教の布教は厳しく制限され、貿易の窓口は長崎の出島に限定された。

3. 幕府の許可を得た朱印船により、東南アジア諸国との間で盛んに行われた。

4. キリスト教の布教を伴い、鉄砲や火薬などの軍事物資が輸入された。

## 答え合わせ・解説

|     |                                                                      |                                                                                                                                                                                                      |
|-----|----------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 問1  | 答え 2<br>分国法                                                          | 室町時代の中期から後期にかけて、幕府の権威が衰え戦乱が全国に広がる中、各地に戦国大名が登場しました。彼らは土地の争いや家臣の統制、年貢の徴収などを円滑に行い、自分の領国を安定して支配するために独自の法律を定めました。鎌倉時代の「御成敗式目」や江戸時代の「武家諸法度」と混同しないよう注意が必要です。                                                |
| 問2  | 答え 1<br>16世紀から17世紀にかけて大量の銀を産出し、アジアだけでなくヨーロッパ諸国との貿易においても重要な役割を果たしたため。 | 石見銀山は、最盛期には世界の銀産出量の約3分の1を占めていたと言われるほど生産量が多く、大航海時代の欧州諸国の地図にもその存在が記されていました。また、銀山を運営するにあたって周辺の森林を過剰に伐採せず、持続可能な資源管理を行っていた点も、世界遺産としての高い評価につながっています。                                                       |
| 問3  | 答え 3<br>足軽などの歩兵による集団戦法が主流となり、戦いの規模が拡大した                              | 鉄砲はそれまでの弓や刀に比べ、習得が比較的容易で高い殺傷能力を持っていたため、大量の足軽に装備させて組織的に運用する集団戦法を生み出しました。これにより、一騎打ちを中心とした従来の戦い方は衰退し、織田信長が長篠の戦いで活用したように、大規模な軍事力を持つ戦国大名が有利になる社会構造へと変化しました。                                               |
| 問4  | 答え 1<br>ルターによる宗教改革の開始 → イエズス会の設立 → フランシスコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来         | まず1517年にルターがドイツで宗教改革を始めました。これを受けてカトリック側が勢力回復のために1534年にイエズス会を設立しました。そしてその一員であるフランシスコ・ザビエルが1549年に日本の鹿児島へ到着し、キリスト教を伝えました。この時系列は「宗教改革への対抗手段として海外布教が始まった」という因果関係と結びついています。                                |
| 問5  | 答え 2<br>ポルトガル                                                        | 1543年に種子島へ鉄砲を伝えたのはポルトガル人です。この出来事をきっかけに、日本国内で鉄砲の量産が始まり、戦国時代の戦術が大きく変化しました。また、ポルトガルとの貿易は「南蛮貿易」と呼ばれ、キリスト教の布教と密接に結びついていたことが特徴です。                                                                          |
| 問6  | 答え 2<br>分国法                                                          | 室町幕府の権威が衰退した戦国時代、各地の大名は自らの実力で領国を治める必要がありました。そこで、家臣同士の私的な争いを禁じる「喧嘩両成敗」の規定や、年貢に関する取り決めなどを定めた独自の法を制定しました。江戸幕府が制定した「公事方御定書」とは時代背景が異なります。                                                                 |
| 問7  | 答え 2<br>これは下剋上の風潮のもとで戦国大名が定めた分国法に関する記述である。                           | 朝倉氏の城の建築制限や武田氏の喧嘩両成敗などは、戦国大名が家臣を取りしまり領国を支配するために定めた分国法の具体例となります。江戸時代の武家諸法度とは時期や目的が異なります。                                                                                                              |
| 問8  | 答え 4<br>尼子氏と毛利氏                                                      | 石見銀山は現在の島根県大田市に位置し、戦国時代にはその莫大な利益を求めて周辺勢力が激しく争いました。当初は出雲国（現在の島根県東部）を拠点とした尼子氏が支配を強めていましたが、安芸国（現在の広島県）から勢力を伸ばした毛利氏がこれに挑み、長期にわたる抗争の末に毛利氏が支配権を確立しました。山梨県の武田氏や鹿児島県の島津氏は、活動拠点が異なるためこの地の直接的な支配権争いには関わっていません。 |
| 問9  | 答え 3<br>喜望峰                                                          | アフリカ大陸の最南端付近にあるこの地点は、ポルトガルの航海者バルトロメウ・ディアスによって到達され、のちにバスコ・ダ・ガマがここを通過してインド洋へと入り、インドへの航路を確立しました。大航海時代におけるインド航路の象徴的な中継地点です。                                                                              |
| 問10 | 答え 3<br>戦国大名                                                         | 下剋上の風潮によって、幕府から任命された守護の地位を奪ったり、地域の有力な武士が実力をつけたりすることで新しい支配者が現れました。彼らは自らの力で領国内の家臣や農民を統制し、他の地域と争いながら勢力を広めました。                                                                                           |
| 問11 | 答え 3<br>分国法                                                          | 室町幕府の支配力が弱まった戦国時代、各地の戦国大名は自らの領国を自立して治める必要がありました。そこで、家臣同士の争いを禁じる「喧嘩両成敗」や、年貢の徴収、婚姻の制限などを定めた独自の法である分国法（家法）を制定しました。なお、御成敗式目は鎌倉時代、武家諸法度や公事方御定書は江戸時代の法です。                                                  |
| 問12 | 答え 4<br>大名が家臣や商工業者を城の周辺に集めて住ませ、政治・軍事・経済の拠点とした。                       | 戦国大名は、それまで各地の領地に散らばっていた家臣を城の周囲に集住させることで、軍事的な動員を容易にし、統制を強めました。また、商工業者も呼び寄せることで、武器の製造や物資の流通を活性化させ、領国の経済を発展させました。これが後の近世都市の原型となりました。                                                                    |
| 問13 | 答え 1<br>家臣同士の私闘による戦力の消耗を防ぎ、大名を中心とした組織的な団結を固めるため。                     | 戦国時代は常に他国からの侵略のリスクがあったため、大名にとって家臣団の結束は死活問題でした。家臣同士が私的な遺恨で争い、戦力が削られることを防ぐため、分国法を通じて「争いの理由は問わず、両者を処罰する」という厳しいルールを課し、紛争の解決は大名による裁判に委ねさせることで、主君としての統制力を強めようとしたのです。                                       |
| 問14 | 答え 4<br>キリスト教の布教を伴い、鉄砲や火薬などの軍事物資が輸入された。                              | ポルトガルとの南蛮貿易では、戦国大名たちが武力強化のために鉄砲やその原料となる硝石（火薬の原料）を強く求めました。宣教師たちは貿易の利益を背景に布教活動への協力を求め、多くの戦国大名が貿易の利潤を得るためにキリスト教の布教を許可しました。                                                                              |